

公開朗読台本版 *David Copperfield* 研究

— その言語と意義 —

佐藤 真二

I. 序

I begin at Norwich on the 28th....I am going to do *Copperfield*, and shall be curious to test its effect on the Edinburgh people. It has been quite a job so to piece portions of the long book together, as to make something continuous out of it; but I hope I have got something varied and dramatic.¹

ディケンズは、*David Copperfield*の公開朗読に関してこのように語った。この言葉の通り、ディケンズは、ミスター・ペゴティのエミリー捜索と、デイヴィッドとドーラの新婚生活を中心とする朗読台本版*David Copperfield*を、1861年に完成し、10月28日に、Yarmouthにほど近いNorwichにおいてその初演を迎えた。

この朗読台本は、作品から一つの人物やエピソードを抜き出すという以前の手法と異なり、長編小説の半分以上にまたがる筋をつなぎあわせることに初めて取り組んだ意欲作であった。そして、ミコーバー夫妻も登場し、Yarmouthの嵐で劇的に幕を閉じる、代表作中の代表作からの公開朗読は、当然の如く、英米両国において大好評を博し、朗読回数も、全レパートリー中の五番目に当たる71回を数えた。尚、この公開朗読台本に関する諸事情に関しては、Philip Collins氏の、*Charles Dickens : The Public Readings*²に詳しいので参照願いたい。

本論では、まず、音声として表現される朗読の中心要素の一つである、登場人物の台詞を、言語学の観点から考察する。更に、原作と朗読台本を比較検討し、朗読台本に窺えるディケンズの姿を探りたい。

Ⅱ. 朗読台本の言語

ディケンズは元来演劇を愛好し、自らアマチュア劇団を率いて、出演は勿論、演出をも手がけた作家であった。ディケンズの小説においては、登場人物が話す言葉と地の文(narrative)の両者に、重要な役割が与えられている。それは、朗読台本においても同様である。

朗読台本版*David Copperfield*においては、登場人物の台詞が、作品全体の約半分を占める。その中で、特に大きな比重を占め、朗読に効果的な役割を果たしているのが、ミスター・ペゴティとミコーバー夫妻である。この三者の台詞（手紙を含む）は、作品全体の約3割を占める。

逆に、語り手デイヴィッドのnarrativeが中心となる部分は、第5章のデイヴィッドとドーラの恋愛から新婚生活の場面と、第6章のYarmouthでの嵐の場面である。

本章では、声として表現される朗読という観点から、ミスター・ペゴティとミスター・ミコーバーの台詞に焦点を絞り、その特徴を分析することにする。

(i) ミスター・ペゴティの言語

Norfolkに位置するYarmouthの漁師であるミスター・ペゴティの言葉には、East Angliaの地域的特徴と、lower classの言葉に見られる非標準英語(non-standard English)という階級的・社会的特徴が与えられている。ここでは、主に、地域的特徴を、それが最も顕著に現れる発音を中心に分析することにする。ディケンズはミスター・ペゴティの発音を独特の綴りで表記するが、その表記と、実際のEast Anglia地方のaccentの類似点と相違点について検討したい。

A. East Anglia地方の発音体系

East Anglia地方の発音で、Englandの標準的発音(Received Pronunciation: 以後RPと略記)と異なるのは、主に以下の点である。³

A-1. 母音

RPとの相違は、主に長母音と二重母音に見られる。

RP	East Anglia
/ɑ:/	/ɑ:/
/u:/	/ʊ:/
/əʊ/	/ʌu, u:, (ʊ)/
/ɪə/	/ɛ:/
/ɛə/	/ɛ:/
/ɔɪ/	/oi/
/aɪ/	/ʌi/

A-2. 子音

- ・ /t/ は特に語尾において、そして、母音の間で変動的に、声門閉鎖音 (glottal stop /ʔ/) となる。
- ・ /j/ の脱落。(yod dropping)
- ・ /h/ は一般的に脱落しない。

A-3. 韻律的特徴

East Anglia地方の発音の特色として、発話の中で強勢を受ける母音は非常に長く伸ばされ、逆に、強勢を受けない母音は短縮され、場合によって脱落するという現象がある。

B. ディケンズの綴りと East Anglian accent

以下に引用する公開朗読台本版 *David Copperfield* の語句等は、他に注釈が付されない場合、*Charles Dickens: The Public Readings* からのものである。() 内は、出典の該当頁を示す。なお、テキスト中で、同一の語句等が複数回使用されている場合も、出典は一箇所のみ記すこととする。

B-1. 母音 [() 内は標準英語の綴りを示す]

・ *theer*(*there*)(p.220), *heer*(*here*)(p.221), *wheer*(*where*)(p.236); East Anglia地方の発音でRPとの相違が最も際立つ /ɪə, ɛə/ → /ɛ:/ が、ここには表現されている。なお、*hear*の過去形も *heard*(p.220)と表記されるが、East Anglia地

方において、hearの過去形の発音は/hɛ:d/であり、これはそれを正しく示したものと言える。

・doen't(don't)(p.221); East Anglia地方においては、現代英語で/əʊ/の音を持つ語に、中英語(Middle English)の/ɔ:/と/ou/の対立を源とする/u:/と/ʌu/の対立が保持されているものがある。前者の代表的な綴りは、o、oCe(C=consonant)、oaであり、後者は、ow、1の前のoである。具体例は以下の通りである。⁴

/u:/	/ʌu/
moan	mown
sole	sowl
nose	knows

ディケンズが表記したdoen'tは、この相違、即ち、RPの/dəunt/ではなく、/du:nt/を表す可能性がある。ただし、作品中でこれに該当する他の語(boat, road, home 等)は標準英語の綴りで表記されている。

・trew(true)(p.221); これは、/u:/→/ɜ:/を表記した可能性があるが、確かとは言えない。

・wureld(world)(p.226); 作品中、標準英語と異なる綴りで表記され、East Anglia地方の発音表記が試みられたと考えられるが、実際にはEast Anglia地方の英語にはそうした発音が認められないという語がいくつか存在する。このwureldもその一つである。East Anglia地方において、worldの母音はRPと同じく/ɜ:/である。また、この綴りで/r/の強調を表した可能性もあるが、East AngliaではRP同様non-rhoticであり、/r/は発音されない。他の例には次のようなものがある。thowts(thoughts)(p.236), sech(such)(p.237)

・他に、強勢を受けない母音の弱化や脱落の表記が多く見られるが、これらは、地域的特徴と言うよりは、階級が下がるほど多く現れる、階級的、社会的特徴である。例：foller(follow)(p.221), winder(window)(p.225), Em'ly(Emily)(p.220), sim'lar(similar)(p.237)

B-2. 子音

・ gratitooode(gratitude)(p.237); この綴りは、/grætitu:d/という yod dropping を示したものと考えられる。類例に creetur(creature)(p.221)がある。これは、/kri:tə/という発音を示したものと考えられる。RPでの発音は /kri:tʃə/ であり、/j/は含まれず、厳密には yod dropping ではないが、それに相当するものと見なし得る。

・ art(heart)(p.221); /h/は通常保たれるが、この語の発音は、K.J.Fieldingも 'special case' と指摘するように、/a:t/である。作品中、/h/を持つ他の語は、通例、hを伴った綴りで表記されるが、これは、この地方の発音の特徴と一致する。

・ 母音の場合同様、階級的、社会的特徴である弱音の消失の表記は多く認められる。例：o'(of)(p.221), a'most(almost)(p.226), arter(after)(p.221), Mas'r(Master)(p.220), on'y(only)(p.237), stanning(standing)(p.237)

・ anythink(anything)(p.221); これも East Anglia 地方に限らず、非標準英語一般に見られる発音である。

B-3. 韻律的特徴

・ ex-cuse(excuse)(p.220); ハイフンを挿入したこの表記は、強勢を受ける母音の前に pause を置くことにより、その母音を一層強調して伸ばす特徴を表すことを意図したものであるかもしれない。しかし、他の類例は作品中には見られない。

C. まとめ

以上の通り、ディケンズによるミスター・ペゴティの台詞の発音表記は、East Anglia 地方の発音を精密に再現したものではなく、一般的な非標準英語を基盤として、それに、East Anglia 地方の発音の中で最も際立つ /ɪə, eə/ → /ɛ:/ を加えた程度のものであると分かる。

D. ミスター・ペゴティの台詞の発音表記の試み

ミスター・ペゴティの台詞の一部を、East Anglia 地方の英語と非標準英語の発音を加味して表記すると、次のようになると考えられる。

以下の文中において、前出の地域的および階級的発音の変種に相当すると考えられる語は次のものである。

- ・ 地域：here（この頁では標準的な綴りで表記されている）/hɛ:/, theer /ðɛ:/, dear/dɛ:/, heerd/hɛ:d/, brightest/brʌi?est/, night/nʌi?/, life/lʌif/
- ・ 階級：Em'ly/ɛmlɪ/, little/lɪ?l/, Mas'r/ma:sə/, gentl'man/dʒenlmən/, it/i?/
- ・ 前出以外の階級：my/mɪ/, darling/da:lɪn/

Em'ly, my darling, come here, come here, my little witch!

/ɛmlɪ mɪ da:lɪn kʌm hɛ: kʌm hɛ: mɪ lɪ? l wɪtʃ /

Theer's Mas'r Davy's friend, my dear!

/ðɛ:z ma:sə deɪvɪz frend mɪ dɛ:/

Theer's the gentl'man as you've heerd on, Em'ly.

/ðɛ:z ðə dʒenlmən əz jəv hɛ:d ɒn ɛmlɪ /

He comes to see you, along with Mas'r Davy,

/hɪ kʌmz tə si: jə əlɒŋ wɪð ma:sə deɪvɪ/

on the brightest night of your uncle's life

/ɒn ðə brʌi?es? nʌi? əv jə ʌŋklz lʌɪf /

as ever was or will be, horroar for it.(p.220)

/əz evə wəz ə wɪl bi hʊrə: fə ɪ?/

E. 今後の課題と問題点

East Anglia地方の発音と一口に言っても、それは、例えば、NorfolkとSuffolkでは差異があるであろうし、Norfolkの中でも、NorwichとYarmouthでは多少の違いがあると考えられる。また、Yarmouthにおいても、ミスター・ペゴティのような漁師と、他の職業に携わる人間では用いる言語に変化がみられるであろう。更に、ディケンズがこの土地を訪れた19世紀の中頃と20世紀末の現在との間に、言語の変化はやはり起こったと考えられる

のは当然である。今回は、Norwichの発音を基準として研究したが、⁶ 今後は、そのような、時間的・空間的差異をふまえて、ディケンズが耳にし、作品に用いようとした英語の音声を追求することを課題としたい。

(ii) ミスター・ミコーバーの言語

ディケンズが創造した数多くの人物の中でも、ひととき強烈な印象を残すミスター・ミコーバーの魅力のひとつは、その言葉である。その特徴は、ミスター・ペゴティの場合とは異なり、formalityにある。即ち、本来であれば、informalな、くだけた言葉遣いや、話し言葉を使う状況で、formalな、形式張った言葉、書き言葉を使うことによって生じるおかしさである。

formalな言語、書き言葉の言語の特徴としては、語(word)や言葉遣い(phraseology)の違いの他に、文法上では、短縮形や省略、付加疑問文を用いないこと、そして、非人称形、従属節、不定形動詞の使用などが上げられる。⁷

A. ミスター・ミコーバーの台詞の分析

ここでは、ミスター・ミコーバーの台詞を具体的に取り上げ、その特徴を指摘したい。次の二文は、ミコーバー夫妻がデイヴィッドの部屋での食事に招待された際の台詞の中で、上記の特徴がよく現れているのである。

A-1.

I am at present established on what may be designated as a small and unassuming scale; but, you are aware that I have, in the course of my career, surmounted difficulties and conquered obstacles. (p.230)

親しい友人間の会話としては硬すぎる要素としては以下のものが挙げられる。→は、相当する、よりinformalな、口語的表現である。

a. 語

- ・ designate → call
- ・ unassuming → modest, not rich

84

- surmount → get over, overcome
- difficulty → trouble, problem
- conquer → get over, overcome
- obstacle → trouble, problem

b. 句

- I am...established → I am
- at present → now
- what may be designated as → what is called
- a small and unassuming scale → not rich, poor
- you are aware → you know
- in the course of my career → in my life, in the past

c. 文法

- 短縮形が使われない → I am, you are, I have
- 省略可能なものも省略されない (接続詞that) → you are aware that I have

d. informalな文への書換え

上記の文を、試みに、くだけた、口語的な英語に改めてみたい。

I'm poor now. But, you know, I've $\left. \begin{array}{l} \text{got (gone) through many things} \\ \text{had many troubles} \\ \text{overcome many difficulties} \end{array} \right\}$ in my life.

A-2.

You are no stranger to the fact, that there have been periods of my life, when it has been requisite that I should pause, until certain expected events should turn up—when it has been necessary that I should fall back before making what I trust I shall not be accused of presumption in terming—a spring.(p.230)

a. 語

- period → time
- requisite → necessary
- pause → stop
- event → thing
- trust → think
- presumption → cheek, airs, impertinence
- terming → calling

b. 句

- You are no stranger to the fact → You know
- certain expected events → something

c. 文法

1. 短縮形が使われない

- You are → you're
- there have been → there've been
- it has been → it's been
- I should → I'd
- I shall not → I'll not, I shan't

2. 非人称形の使用

- It has been requisite that I → I needed to...

d. informalな文への書換え

You know, I needed to wait until something turned up, I needed to fall back before going forward.

B. retold版の英語との比較

ここで、ミスター・ミコーバーの台詞を、ディケンズの原文と、平明な英語で書かれたretold版の表現とで比較してみたい。なお、朗読台本版では、分量の制限のため、比較に適した台詞を選択することが困難であったため、ここでの引用は小説のものとする。

B-1.

Under the impression,...that your peregrination in this metropolis have not yet been extensive, and that you might have some difficulty in penetrating the arcana of the Modern Babylon in the direction of the City Road—in short,...that you might lose yourself—I shall be happy to call this evening, and install you in the knowledge of the nearest way. [原文]⁸

I believe that you may not yet know all the streets of this great city and may have difficulty in discovering the house in which I live; in short, you may lose yourself. So I will come and show you the way this evening. [語彙制限1800語レベルのretold版]⁹

原文の表現が以下のように書き換えられている。

- ・ Under the impression → I believe
- ・ metropolis, the Modern Babylon → great city
- ・ your peregrination...have not yet been extensive → you may not yet know all the streets of...
- ・ penetrating the arcana of the Modern Babylon in the direction of the City Road → discovering the house in which I live
- ・ I shall be happy to call this evening, and install you in the knowledge of the nearest way. → I will come and show you the way this evening.

B-2.

Annual income twenty pounds, annual expenditure nineteen nineteen six, result happiness. Annual income twenty pounds, annual expenditure twenty pounds ought and six, result misery. [原文]¹⁰

Yearly income £ 20, yearly expenses £ 19, result happiness; yearly expenses £ 21, result unhappiness and ruin.[語彙制限1800語レベルのretold版]¹¹

If a man earns twenty pounds a year, and spends nineteen pounds and nineteen shillings, the result is happiness. But if he spends twenty pounds and one shilling, the result is misery![語彙制限1800語レベルのretold版]¹²

Salary twenty pounds, expenses 19 pounds, result — happiness; Salary twenty pounds, expenses twenty-one pounds, result — ruin.[語彙制限3100語レベルのretold版]¹³

原文の表現が以下のように書き換えられている。

- annual income twenty pounds → yearly income £ 20
 - salary twenty pounds
 - If a man earns twenty pounds a years
- annual expenditure nineteen nineteen six
 - yearly expenses £ 19
 - expenses 19 pounds
 - spends nineteen pounds and nineteen shillings
- twenty pounds ought and six → £ 21
 - twenty pounds and one shilling
 - twenty-one pounds
- result misery → result unhappiness and ruin
 - the result is misery!
 - result — ruin

C. まとめ

以上見てきた通り、ミスター・ミコーバーの言語の魅力は、場違いに formal な言葉遣いや、必要以上に細部まで言及し、必要以上に多くの言葉を用いるところから生じるおかしさである。ミスター・ミコーバーに、自然な言語が与えられていたならば、その魅力は半減するであろう。ディケンズは、ここでも様々な文体を駆使して作品の面白さをつくり出している。

ディケンズは、そうした言葉遣いの、魅力と危険を次のように述べる。

We talk about the tyranny of words, but we like to tyrannise over them too; we are fond of having a large superfluous establishment of words to wait upon us on great occasions; we think it looks important, and sounds well. As we are not particular about the meaning of our liveries on state occasions, if they be but fine and numerous enough, so, the meaning or necessity of our words is a secondary consideration, if there be but a great parade of them.¹⁴

Ⅲ. 公開朗読台本版*David Copperfield*の意義

(i) 小説と朗読台本

ディケンズが1850年に小説*David Copperfield*の執筆を終えてから、1861年にその公開朗読台本を完成させる迄に、10年以上の歳月が流れている。しかし、それ以前に、この小説の朗読台本化の計画が皆無であった訳ではない。その構想は、ディケンズが1858年に有料公開朗読を開始する3年前、慈善事業として朗読を始めていた1855年に、既に存在した。次の書簡には、その構想と、実現不可能の理由が述べられている。

Having already read two Christmas books at Birmingham, I should like to get out of that restriction, and have a swim in the broader waters of one of my longer books. I have been poring over *Copperfield* (which is my favourite), with the idea of getting a reading out of it, to be called by such names as “Young Housekeeping, and Little Emily” ,...the story of David's married life with Dora, and the story of Mr. Peggotty's search for his Niece, within the time. This is my object. If I could possibly bring it to bear, it would make a very attractive reading, with a strong interest in it, and a certain completeness.

This is exactly the state of the case. I don't mind confiding to you that I never can approach the book with perfect composure (it had such possession of me when I wrote it), and that I no sooner begin to try to get it into this

form, than I begin to read it all and to feel that I can't disturb it.¹⁵

ディケンズは、魅力的な朗読台本の可能性を確信しながらも、この小説に対するあまりの愛着の故に、それを解体して朗読台本を作成することは不可能であると述べている。ディケンズにとって、*David Copperfield* という小説は、それほど、ある意味で理想的かつ完全な、閉じられた世界であったのだろう。度々指摘される通り、ディケンズとデイヴィッドを単純に同一視することは危険であるが、語り手が、自ら語る回想の中にのめり込んでいく度合いの強さと距離の近さは、同じく一人称の自伝的小説である *Great Expectations* の、距離の保たれた、抑制された語りと比較するならば、明らかであろう。

しかしながら、4年後の1859年の書簡には、同じく朗読台本化に言及しながらも、以前のような、小説に対するこだわりは見られない。

Last year I began to sketch out a Reading, which should include the whole story of Mr. Peggotty and his niece, with some scenes of the Dora marriage by way of relief. Necessarily having a great deal too much in the first instance, I have never completed the design. But I hope to do so...¹⁶

そして、1861年の手紙に見られるように、ディケンズは朗読台本を完成させる。

I have got the Copperfield Reading ready for delivery...¹⁷

ディケンズがあれほど持っていた、小説を解体することに対するこだわりは、何故消滅したのであろうか。その理由は、その間に実人生で起こった様々なできごとにあると思われる。

(ii) マライア・ビードネルとの再会

前出の1855年の書簡からひと月もたたぬうちに、ディケンズは、ドーラのモデルの一人であり、若き日の叶わぬ恋の対象であったマライア・ビードネル(Maria Beadnell)から一通の手紙を受け取る。ディケンズは、この女

性をドーラとして小説世界の中に理想化し、夭逝させ、その中に永遠に封印した筈であった。その、過ぎ去った筈の過去からの手紙にディケンズも情熱的な言葉で返答し、二人は再会を果たす。しかし、その結果は、多くのそうした場合同様、失望であった。マライアは再会の前に、44歳となった自分は、今や、'toothless, fat, old and ugly'¹⁸であるとディケンズに警告していたが、その言葉に誇張はさほどなかったようである。ディケンズはこの再会に関してForsterに次のように語っている。

No one can imagine in the most distant degree what pain the recollection gave me in Copperfield. And, just as I can never open that book as I open any other book, I cannot see the face (even at four-and-forty), or hear the voice, without going wandering away over the ashes of all that youth and hope in the wildest manner.¹⁹

小説*David Copperfield* が、作者の幼少時代から青春時代を理想的に書き直した作品であり、ディケンズがその中に、実人生での満たされぬ様々なものへの代償と慰めを見い出していたとすれば、その世界は、この再会という現実によって打ち砕かれたと言える。ドーラはもはやドーラでしかなく、マライアと見なすことはできない。同様に、ディケンズも、若き日の自分として、この小説の中に入っていくことは困難になった。この小説は、この時点から、ディケンズの人生とは別の、それ自体として存在し始めたと言えるのかも知れない。それは、ディケンズにとっては辛い出来事であったであろう。しかし、それはまた、小説*David Copperfield* の呪縛からの解放を意味したのかも知れない。

(iii) エレンとの出会い、キャサリンとの別れ

ドーラのもう一人のモデルが、ディケンズの妻キャサリン(Catherine)であり、彼女の実生活に対する弱さが、デイヴィッドとドーラの新婚生活の場面に描出されていることは、既知の通りである。ディケンズは、この点に関しても、小説の中で、実人生を理想的に書き直している。デイヴィッドは、Child-wifeであるドーラとの結婚生活に満たされぬ何かを感じるが、その問題は、ドーラが夭逝し、デイヴィッドがアグネスのもとへ導かれる

という、このうえない形で解決する。しかも、ドーラとアグネスの間には、その点に関して相互理解があるという、誠に都合のよい結末である。デイヴィッドは、自ら手を汚すことはなく、総てが円満に収まるのである。

しかし、現実の人生において、ディケンズは、1857年に若き女優エレン・ターナン(Ellen Ternan)に出会うと、彼女に心を奪われてしまう。ディケンズとエレンの関係に関しては、未だ不明な点も多いようであるが、彼女がディケンズの愛人的存在であったことは、ほぼ確実とされている。妻との不和を嘆く次の手紙が、エレンと知り合ってから一、二カ月のうちに書かれていることは、注目に値する。

Poor Catherine and I are not made for each other, and there is no help for it. It is not only that she makes me uneasy and unhappy, but that I make her so too — and much more so.²⁰

そして、翌1861年5月に、ディケンズとキャサリンの関係は、離婚へと到る。

妻以外の女性に夢中になり、離婚という形で家庭を崩壊させたディケンズは、もはや、苦しい少年時代を送り、若き日には恋に盲目になりはしたが、それも解決し、自らの努力と勤勉で、社会的成功と幸福な家庭を手にした作家デイヴィッドと自分を同一視することは不可能となった。今やディケンズは、自分を過ちを犯した人間と見なし得るようになったことであろう。そして、自伝的作品の自己像も、優等生的なデイヴィッドから、恩人ジョーに対して忘恩という罪を犯すピップへと移行するのである。

以上の通り、1855年以後、過酷な現実が、小説*David Copperfield* というディケンズにとっての理想的な世界を打ち砕いた結果、1855年に見られた、小説解体に対するこだわりは消え、それ故、公開朗読台本の作成は可能となったと考えられないだろうか。そして、それと同時に、この作品の中に、新たな意味が見い出されるようになったと思われる。

(iv) スティアフォース

自らの衝動を抑制することができず、遂にはミスター・ペゴティーの家庭を崩壊させたスティアフォース。1861年当時のディケンズは、この人物

に自分を見たのではないだろうか。朗読台本化の原案と、完成された作品の相違もそれを物語るように思われる。

前出の通り、1855年当初にディケンズが付けた仮題は、'Young Housekeeping, and Little Emily'であり、具体的な内容は、'the story of David's married life with Dora, and the story of Mr. Peggotty's search for his Niece'であった。そこにはステイアフォースの名は見られない。前出の1859年の書簡においても同様である。1859年の案は、1855年の原案を単純に踏襲したものと思われるが、両案において、中心人物は、ミスター・ペゴティー、エミリー、デイヴィッド、ドーラであり、ステイアフォースはエミリーの失踪のきっかけであるに過ぎない。

Philip Collins氏によると、ディケンズはまず、この原案に沿った、全5章の朗読台本を作成したが、その後、'Introduction'として、第1章の前にもうひとつの章を加え、それを新たな第1章として、現存する全6章の朗読台本を仕上げた。²¹ Collins氏は、この変更を、筋の展開を自然にする配慮の結果であると、理にかなった説明を加える。²² しかし、それは、ディケンズが朗読台本を作成し、読み込むうちに、自らとステイアフォースの類似に気づき、公開朗読におけるこの人物の存在を中心的なものにしたいと希求した結果と考えられないだろうか。何故なら、新たに加えられた第1章には、以下に引用する通り、ステイアフォースが自らの内面を語る言葉が、小説の第22章と第29章から集中的に収められており、それらはまた、当時のディケンズの心境にも合致すると考えられるからである。

次の台詞は、自分で自分をどうすることもできずに、妻以外の女性に魅かれ、家庭を引き裂いてしまったディケンズの心境とも解釈できる。

Daisy, I wish to God I had had a judicious father these last twenty years!...I wish with all my soul I had been better guided! I wish with all my soul I could guid myself better! (pp.223-24)

次の言葉にも、そうした行為を犯してしまった自分に対する恐怖や嫌悪感を読み取ることができる。

It would be better to be this poor Peggotty, or his lout of a nephew, than be myself, twenty times richer and twenty times wiser, and be the torment to

myself that I have been... (p.224)

I have been afraid of myself. (p.224)

以上の三つの台詞は、原作の第21章と第22章のつなぎとして朗読台本のために加筆された、'To my surprise, he suddenly said, with nothing, that I could see, to lead to it.'(p.223) という言葉に続くものである。Collins氏は、そのつなぎに無理があると指摘する。²³ それは逆に、不自然さを承知しながらも、ディケンズが朗読台本に是非加えたかった台詞の証と解釈できないだろうか。

また、作品のクライマックスであるYarmouthの嵐の場面に関しても、朗読台本において、ステイアフォースにより大きな存在感を与えようという作者の姿勢が窺える。ディケンズは、小説執筆中にはこの場面を、'the Ham and Steerforth chapter'²⁴ と呼びながら、自らの手による朗読台本のアウトラインでは、'the death of Steerforth'²⁵ と、ステイアフォースの名のみを記す。実際に、小説と朗読台本を比較しても、朗読台本ではハムの描写が削減されている。それは、朗読台本の全体量を減少させるためとも考えられるが、次のような、ハムの存在感にとって重要な言葉までカットすることにより、ハムの存在は縮小されたと言える。

Mas'r Davy,...if my time is come, 'tis come. If 'tan't, I'll bide it. Lord above bless you, and bless all! Mates, make me ready! I'm a going off!²⁶

その反対に、朗読台本では、ステイアフォースに言及した文章には、強調を示す下線が付けられている。また、デイヴィッドが船上のステイアフォースを認識する部分では、小説の'and thought I was going distracted, when his action brought an old remembrance to my mind of a once dear friend— the once dear friend'²⁷ という言葉の後に、朗読台本では、'—Steerforth'(p.247) という一言が、やはり下線を伴って加筆されている。実際にディケンズの朗読を聞いたW. M. Wrightは、この文章が読まれた様子を、'and thought I was...'の部分が'Quick'であり、'Steerforth'という言葉の前に'Pause'があったと記録している。²⁸ 音声として表現された場合、ステイアフォースの存在は一層大きく感じられたに違いない。

小説*David Copperfield* 執筆時に、ディケンズが、自分に最も近いと感じた人物は、当然デイヴィッドであった。しかし、朗読台本作成時に、それは、ステイアフォースへと変化していたのではないか。そう考える時、朗読台本におけるデイヴィッドは、未だ初々しさを残した過去の自分であり、ステイアフォースは現在の自分の姿であると作者の目に映ったのかも知れない。次に引用する、デイヴィッドに向けられたステイアフォースの台詞の中で、'you're such a fresh fellow'(p.224)という一文は、原作の他の章の言葉をわざわざ挿入したものである。²⁹ この台詞には、離婚等を経験する前の自分に戻れたらという、この時点のディケンズの、叶わぬ願いが現れているようにも感じられる。

Daisy – for though that's not the name your godfathers and godmothers gave you, you're such a fresh fellow that it's the name I best like to call you by – and I wish, I wish, I wish, you could give it to me!(p.224)

そして、自らが犯した過ちを背負うディケンズは、過去の自分に対して次のように訴える。

Think of me at my best, if circumstances should ever part us! (p.224)

しかし、犯した過ちが消えることはない。それ故、現在の自分に対しては、神の赦しを願わざるを得ないのである。

– *Never more, O God forgive you, Steerforth! to touch that passive hand in love and friendship. Never, never, more!* (p.224)

'O Lord, be merciful to him, a sinner!'³⁰という、やはり神の慈悲を願う表現が、同時期に作成されたと考えられる*Great Expectations* の朗読台本を締めくくる言葉であることも単なる偶然とは言えないであろう。

そして何よりも、そのようなステイアフォースに対するディケンズの真情を物語るのが、次のエピソードではないだろうか。

'Do you cry when you read aloud?' a twelve-year-old American girl asked Dickens, when she waylaid him on a train. 'We all do in our family. And we never read about Tiny Tim, or about Steerforth when his body is washed up on the beach, on Saturday nights, or our eyes are too swollen to go to Sunday School.' — 'Yes, I cry when I read about Steerforth,' Dickens answered quietly.³¹

(v) ドーラ

前出の通り、ドーラのモデルとなったのは、マライア・ビードネルとキャサリンである。そしてディケンズは、1855年以後、かつて愛したこの二人と永遠に別れることになる。しかもそれは、失望や幻滅、痛みを伴う別離であった。特に妻のキャサリンとは、エレン・ターナンにあてた贈り物に関して妻になじられたディケンズが激怒し、間もなく妻は家を出、その後も、キャサリンとその母であるホガース婦人(Mrs. Hogarth)が、エレンがディケンズの愛人であると噂を流したとして、ディケンズが二人に対して謝罪文に署名することを要求するなど、苦々しい別れとなった。

表面上は、自分を正当化することに成功したように見えるディケンズだが、Edgar Johnsonが、次のように指摘する通り、自分にも非があることは承知していた。

He[Dickens] had been far from chivalrous to poor Kate[Catherine]—much less generous than she in her silence had been to him....secretly he[Dickens] knew he was not without reproach.³²

そして、ディケンズは、長年続いていた家庭内の不和に関しても、次のように、自分の性格の問題も認めている。

I claim no immunity from blame. There is plenty of fault on my side, I dare say, in the way of a thousand uncertainties, caprices, and difficulties of disposition; but only time will alter that, and that is, the end which alters everything.³³

離婚から数年が経過した後には作成された公開朗読台本版 *David Copperfield* において、デイヴィッドとドーラの新婚生活を描いた第 5 章には、上記の問題に対するディケンズの気持ちが読み取れるように思われる。特に、以下の、加筆が施された部分には、それが表出していると感じられる。

When you miss *what you would like me to be*, and what I should like to be, and what I think I can never be, say, “Still my foolish Child-wife loves me.” For indeed I do. [italics mine] (p.224)

上の文は、現実生活に弱いドーラが、自分が Child-wife に過ぎないことをデイヴィッドに詫げる部分である。朗読台本では、斜字体とした '*what you would like me to be*' という表現が加えられている。この改訂によって、ドーラは、自分が望む妻の姿ばかりでなく、デイヴィッドが自分に望む姿をも十分に承知しながら、それに答えることができないというニュアンスとなる。これを、ディケンズとキャサリンに置き換えてみると、自分の希望を知りながらも、それができなかったことを妻に謝ってほしいという、ディケンズの心境と受け取ることができるであろう。そしてそれは、ディケンズがキャサリンに対して感じていた罪の意識の裏返しではないだろうか。この文章は、内容上、全く不要なものであるだけに、そこには、是非この一文を加筆したかったディケンズの気持ちが現れているように感じられる。

朗読台本第 5 章は、次の言葉で締めくくられるが、斜字体で示したように、小説の該当部分との違いが認められる。最初の引用が朗読台本、次が小説である。

I invoke the innocent figure that I dearly loved, to come out of the mists and shadows of the Past, and to turn its gentle head towards me once again, *and to bear witness that it was made happy by what I answered.* [italics mine](p.244.)

... and to turn its gentle head towards me once again, *and I can still declare that this one little speech was constantly in my memory.* [italics mine]³⁴

小説でデイヴィッドが亡きドーラを呼び出すのは、自分がドーラの言葉を忘れていないと告げるために過ぎない。これに対して朗読台本では、デイヴィッドはドーラに対して、自分の返答によって彼女がその時幸福になったと証言してくれるように頼んでいる。それはあたかも、裁判において妻に対する過酷な行為を責められるディケンズが、自己の非を認めながらも、自分は冷酷なだけ人間ではなく、彼女を幸せにした瞬間も確かにあったのだとして、その証言を懇願するかのようである。

その晩年、人生が思わぬ方向に展開し、様々な苦心を味わったディケンズは、自らを、罪人とは言わずとも、過ちを犯した人間と見なし得たであろう。ディケンズはここで、そうしたいさかいの象徴的存在であるキャサリンに対して、和解を求めているのではないだろうか。そしてその底流には、自分が犯してきた過ち総てに対する、償いの気持ちが存在したのかも知れない。

IV. 結

没年となった1870年、ディケンズは、'Farewell Reading'として、12回限りの公開朗読を行った。1月11日、ロンドンのSt James's Hallにおける初日を飾る演目に、ディケンズは、*David Copperfield* と 'Bardell and Pickwick' を選択した。この事実も、当作品に対するディケンズの思い入れを語るものであろう。

公開朗読 *David Copperfield* は、実際にディケンズが朗読をした他の朗読レパートリーと比較しても、自伝的で代表作である長編小説を原作として、その長編の半分以上にまたがる筋を持つ唯一の朗読作品であるばかりでなく、その中には、笑いと涙、個性的な登場人物、ストーリーの展開の面白さに加え、人物の話す台詞の楽しさや narrative の描写力を生み出す様々な文体の駆使があり、ディケンズ文学の諸要素が凝縮されていると言える。そのような作品の公開朗読が、聞き手に楽しさを与えたのは当然であるが、その朗読はまた、読み手であるディケンズの胸中にも特別な感情を生み出したに違いない。

'As in my childhood, so in these days when I was a young man...' (p.219) 朗読台本第1頁にあるこの言葉の通り、ディケンズは、小説 *David Copperfield* 執筆時に、自己の幼少時代と、青年時代を回想した。そしてそ

の公開朗読を行った1861年から1870年までの間、更に遠ざかった過去をもう一度、一層の懐かしさを持って振り返ったことであろう。それは、単に、小説を読み返すことからよりも、朗読を行うことによって一層強く感じられたに違いない。何故なら、朗読とは、発声という肉体的行動を伴う追体験であり、しかもこの作品は一人称で書かれている故に、ディケンズが'I'という言葉をお口にすると、それは、デイヴィッドの声でもありながら、ディケンズの声でもあるからである。

自己の人生と類似点の多いこの作品の朗読を、次の一文を読むことによって締めくくるディケンズの胸中にはどのような思いが去来したのであるか。

And on that part of it where she and I had looked for shells, two children—on that part of it where some lighter fragments of the old boat, blown down last night—among the ruins of the home he [Steerforth] had wronged—I saw him[Steerforth] lying with his head upon his arm, as I had often seen him lie at school. (p.248)

Notes

1. Ed. Graham Storey, *The Letters of Charles Dickens IX* (Oxford U.P., 1997), p.476.
2. Ed. Philip Collins, *Charles Dickens: The Public Readings* (Oxford U.P., 1975)
3. J. C. Wells, *Accents of English 2* (Cambridge U.P., 1982) pp.337-341. Arthur Hughes and Peter Trudgill, *English Accents and Dialects*, Third Edition, (Arnold, 1996) pp.74-77.
4. *Accents of English 2*, p.337.
5. K. J. Fielding, 'David Copperfield and Dialect', *Times Literary Supplement*, 30 April 1949. また、この点に関しては、筆者が1998年にGreat Yarmouthで行った調査によっても確かめられた。
6. Great Yarmouthに地理的に最も近い場所で、信頼できる音声体系が入手可能であったのが、East Anglia地方の代表例としてのNorwichであった。
7. *A Communicative Grammar of English*, Second Edition, (Longman, 1994) pp. 9-35.
8. Charles Dickens, *David Copperfield* (Everyman, 1993), p.149.
9. *David Copperfield*, Longman Classics (Longman, 1987), p.27.
10. *David Copperfield* (Everyman, 1993), p.166.
11. *David Copperfield*, Longman Classics (Longman, 1987), p.30.
12. *David Copperfield*, Oxford Bookworms (Oxford, 1994), p.20.
13. *David Copperfield*, Oxford Progressive English Readers (Oxford, 1992), p.21.
14. *Ibid.*, p.713.
15. *The Letters of Charles Dickens VII* (Oxford U.P., 1993), p.515.
16. *The Letters of Charles Dickens IX*, p.80.

17. Ibid., p.447.
18. Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* (Viking, 1977), p.418.
19. *The Letters of Charles Dickens* VII, p.557.
20. John Forster, *The Life of Charles Dickens* (Oxford U.P.), p.704.
21. *Charles Dickens: The Public Readings*, pp.213-18.
22. Ibid., pp.213-18
23. Ibid., p.223n.
24. *The Letters of Charles Dickens* VI, p.169.
25. *Charles Dickens: The Public Readings*, p.215.
26. *David Copperfield* (Everyman, 1993), p.751
27. Ibid., p.752.
28. *Charles Dickens: The Public Readings*, p.247n.
29. *David Copperfield* (Everyman, 1993), p.275.
30. *Charles Dickens: The Public Readings*, p.363.
31. Ibid., p.248n.
32. Johnson, p.463.
33. Ibid., p.449.
34. *David Copperfield* (Everyman, 1993), p.610.